

第5章 高橋和巳と『邪宗門』①

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

第一節 「世なおし」思想の極限化に至る思考実験

まず第5章の本論に入るまえに、戦後を代表する思想家・詩人である吉本隆明は、中山みきの生きざまと「おふでさき」について、その思想を彼なりに「近代の古典的思想の実践例」として読み切っていたのではないかと確信させる『高橋和巳作品集4 邪宗門』(河出書房新社)の「あとがき」に寄稿している「新興宗教」(641～659頁)があるということを紹介しておきたい。つまり、本稿最終章であつた吉本の『思想のアンソロジー』(ちくま学芸文庫)に『解説』された「中山みき『おふでさき』」の文章の背景には、天理教原典や、高橋和巳の『邪宗門』の背景をなす緻密な大本教史や天理教史の和辻哲郎が言う「あらわにされた」「出来事」研究がなされていたと思われるからである。また、吉本隆明と松岡正剛が応酬する『遊』(1982年9月特大号・特集・「日本する」)も、「こと」的世界観への未来像構築に勇気を与えうる貴重な文献になるであろう。

さて、『邪宗門』は高橋和巳(1931～1971)の小説の中で2千枚のもっともながい大河小説であり、『朝日ジャーナル』1965年1月3日号から翌年の5月29日まで連載された。宗門としてあつてはならないものが「あらわにされた」「こと」とあるところの「邪宗門」の「もの」がたりである。歴史的には邪宗門は、江戸時代の禁制の文脈からキリスト教を指していた。誤解と白眼視に堪え、いかに世の立替え、立直しを叫びつづけても、社会や国家から邪宗門は徹底的に排除される。偏狭な軍国皇道政治につきすすむ戦争前夜、昭和10年12月には、大正10年の第一次大本事件につづいて、第二次大本教弾圧事件が勃発。綾部、亀岡両巨大聖地本部破壊には、武装した430余人の警官の包囲をうける。苑内にいた教主出口王仁三郎や本部役員ほか100人余りが検挙され京都に護送されたり、亀岡署に拘置された。両本部にはダイナマイト数千発がぶち込まれ、鉄骨はガスで焼き切れ、樹木は切りたおされ、石段さえも削りつぶされて、一帯は見る影もない荒野と化してしまつたという。日本史上類を見ない大弾圧を受けた戦争前夜の教団大本。数多くの新興宗教を生んだ丹波篠山盆地の一教団があたえたその宗教思想的影響はいまも小さくはない。教主出口には『霊界物語』(全72巻)、『聖師歌日記』(全53巻)のほか数種の書物がある。第二次大本教弾圧事件につづいて、昭和11年9月27日には「PL教団」初代教主御木徳一が教祖の地位を譲った翌日に警察に拘引され、「ひとのみち事件」がはじまつた。

一方、天理教では昭和11年に教祖五十年祭、翌12年には立教百年祭の両年祭が執行された。教祖五十年祭直後には2・26事件が発生。このころより軍隊が国家の主導権をにぎりはじめ、同13年には「泥海古記」に関連ある一切の教説は之を行わず」と、軍部によって強制された「論達第八号」の「革新指令」が公布された。天理教団が執拗な追求と攻撃をうけた理由は、「元の理」が近代天皇制のもとで絶対化された記紀神話とは根本的に異質であり、そのひろめは記紀神話の権威を脅かすものであつたという点にある。教説の受難史の詳細については拙著『中山みき「元の理」を読み解く』(日本地域社会研究所、第1章第2節)を参照されたい。

これら両宗教を素材にしたであろう高橋和巳の『邪宗門』は、若者に発表当時おきな衝撃をあたえ、学生運動にかかわる彼らがバイブルのように読んだと言われ、「東大教官がすすめる100冊」では、世界の数々の名著をおさえ第8位の評価をうけている。『邪宗門』は文学というアプローチで描かれた日本の精神史でもあつた。高橋はこの本になにを込めようとしたのか。彼は「あとがき」において次のように述べる。

発想の端緒は、日本の現代精神史を踏まえつつ、すべての宗教がその登場のはじめには色濃く持っている〈世なおし〉の思想を、教団の膨脹にとまなう様々の妥協を排し

て極限化すればどうなるかを、思考実験をしてみたいという事であつた。表題を「邪宗門」と銘うったのも、むしろ世人から邪宗門と黙される限りにおいて、宗教は熾烈にしてかつ本質的な問いかけの迫力を持ち、かつ人間の精神にとって宗教はいかなる位置をしめ、いかなる意味をもつかの問題性をも豊富にはらむと常々考えていたからである……。

繰り返しをおそれずに言えば、私の描かんとしたものは、あくまで歴史的事実ではなく、総体としての現実と一定の対応関係を持つ精神史であり、かつ私の悲哀と志を託した宗教団体の理念とその精神史との葛藤だつたためである。私が自らを確め、自らを深めるためには、私が生まれ育つたこの日本の現代精神と私の夢とを、人間をその総体において考究しうる文学の領域において格闘させることが必要だつたのである。

高橋が日本に現存する新宗教団体の二三を遍歴、その世なおしの教えや教史を研究し、そこから若干のヒントを得たという、いわゆる「邪宗門」と対立せざるをえない国家の本質とはなにか。こうした問いかけは史観によって答えられることがおおい。史観とは「なぜこのような日本の社会や国家ができたのか」という説明であるとされる。「史観」が制度史に限定されるなら「史実」と照合しやすい。しかし、この問いかけへの回答がむずかしいのは、その問題の対象に精神史、つまり精神の歴史がひそむからである。人々の内面に存在する精神は、さまざまな事件の表層からは見えてこない。精神史は複数の事象の整合的なまとめよりも、信仰や教理などを簡素なモデルとして提出する必要がある。天理教でいえば「泥海古記」や「おふでさき」「みかぐらうた」などから抽出された人間世界創造・救済をのべた簡潔な教典類、他の新興宗教にあつては天国や浄土の確信、あるいは奇跡や聖者への帰依などだ。こうしたモデルは国家からすればその簡素さゆえに思想ではなく、虚構に近いとみられる。この意味において精神史は文学にかぎりなく接近する可能性を得ることができるともいえよう。文学によって前近代から近代の日本の精神史を描き出すところみは数おこなされてきたが、高橋和巳の『邪宗門』は、そのスケールにおいても突出しているというのが識者一般の評価である。

天理教も天保9年の立教以来、中山みき教祖の17、18回にもおよぶ官憲の召喚問答、および投獄がつづき、第二次世界大戦がおわるまで、組織が巨大化するに比例して国家が敵対し排除する「邪宗門」として弾圧され、「つとめ」や神名までも強制変更、原典『おふでさき』などは国家により全教会から没収された。それはあたかも国家にとっては「邪宗門」が、「天皇制」という「国家共同幻想」を映し出す鏡像であるかのように国家の精神性を対照的に映し出す。この逆転鏡像から精神史の史観のモデルを描きだすことで、日本国家の精神的な呪縛である「共同幻想」というものの正体を暴露することが可能になる。高橋和巳の『邪宗門』はこの課題(国家共同幻想の暴露)に、小説としての豊穣さをふくめながら真正面に挑んだ作品でもあり、近代日本の精神的な呪縛の仕組みを逆説的に描きだしている。しかもこの逆説には、さらにもう一段の逆説がくわわり、国家に反逆する反国家精神や批判もまた、結果的に倒錯した共同幻想の問題をふくむことをあきらかにした。この課題、つまり国家批判の倒錯性は戦後、いわゆる左翼勢力・マルキシズムが倒錯していく傾向をなぞってさえている。くわえてそれはまた信仰の自由を法的に獲得した戦後の諸新興宗教、維新前後の新興宗教教団にも通底する問題をも包括しているといえる。その意味で『邪宗門』は、「共同幻想」を極限化させるとどのように成るかという思考実験でもあつたと評価されるであろう。